

埋立地の風景



広重 名所江戸百景 深川洲崎十万坪
 国立国会図書館デジタルコレクション

下町文化



NO.
286
 2019.7.12

発行
 江東区地域振興部
 文化観光課文化財係
 〒135-8383
 江東区東陽4-11-28
 TEL.(03)3647-9819
<http://www.city.koto.lg.jp/>

- 埋立地の風景
- 城東の村を歩く⑫
 平井新田
- 江戸の獵師町を探る
 深川獵師町の築造
- 井の頭公園の辛夷碑
- 中川船番所資料館収蔵資料展
 「深川にあった肥料商店の歴史」
- 瓢池園と旭焼製造場
- 文化財まめ知識 12
 江東区内の道標3

長い梅雨が明けるといよいよ夏本番を迎えます。近年は酷暑などといわれる日も多いため、決して無理をせず、体調管理には気をつけたいものです。さて、夏といえば海を思い浮かべる方も多いでしょう。南が海に面した江東区は、歴史的にも海との深い関わりのもと発展しました。江戸前での魚介の生産や汐干狩りなど、前面に広がる海は、さまざまな恵をもたらしました。そもそも、江戸時代初期のころ、亀戸北部など一部地域を除いた本区のほとんどは、海(干潟)のような状態で、そこを埋め立てて成立したのが現在の江東区域と考えられます。区東部の城東地域に多くの新田が成立したのは17世紀初・中期頃で、砂町の由来ともなった砂村新田はその代表的な存在です。

一方、深川地域の場合、最南部の越中島および永代2丁目辺りから東の木場4・5丁目、その南の洲崎神社辺りまでの海岸線が整備されたのは、1700年前後(元禄期)でした。そして、この流れは、さらにその東側に広大な平井新田を成立させました。明和2年(1765)のことでした。

海に面した埋立地の平井新田が、成立後にどのような様相を呈したのか、絵図をもとに、次ページで見えてきましょう。

平井新田

平井新田は、東は砂村新田、西は深川木場にいたる広大な新開地で、北は砂村新田・石小田新田、南は海に面していました。現在の住所でいうと南砂2、同3付近から東陽3、同5付近にいたります。

海に面して東西に広がった平井新田



天保11年「深川十万坪より中川海手迄」
国立国会図書館デジタルコレクション

は、どのような村だったのでしょうか。武蔵国の村々が幕府に書上げ、天保元年（1830）に成立した『新編武蔵風土記稿』(以下「風土記稿」)によれば、総坪数はおよそ20万坪余。埋め立て期間は明和2年（1765）6月17日から同年11月22日までのわずか5ヶ月で、江戸城の堀を浚った土で埋め立てたとあります。この辺りは、もともと遠浅の海であったため、短期間で土地

が造成されたということになります。また、同書によれば埋め立てを願ったのは、満右衛門と虎五郎なる人物で、その姓が平井であったことから新田名としたようです。江戸までの距離はおよそ1里（4km）という近郊に位置し、民家は『風土記稿』の頃には32軒でした。広大な土地にしては家数が少ない様に思えますが、天保11年（1840）に描かれた絵図をみると同新田および北に隣接した砂村新田には、松平大膳太夫（長州毛利藩）、松平越前守（越前福井藩）、細川越中守（肥後熊本藩）など、多くの大名屋敷が存在していたことがわかります。ところが、これらの屋敷は幕府からの拝領屋敷（上・中・下屋敷）とは異なるもので、平井新田にあった屋敷はそのほとんどが町並屋敷と記されています。これらは、北に面した砂村新田の抱屋敷と同じように、百姓地を購入して成立したものと考えられます。ちなみに、抱屋敷は江戸時代に武家や寺社、町人などが百姓地を購入して、そこに囲いや家屋を建てたもので、江戸の近郊に多く見られました（『国史大辞典』）。区内にあった砂村新田の毛利藩抱屋敷は、元藩主の隠居所などに使用さ

れたことがわかっています。この屋敷の入手の経緯は、寛政2年（1790）に毛利家が入手し、その後いったん他家に譲渡されましたが、文政4年（1821）に再び譲り受けたものです。そして、3年後の文政7年に藩主を退任した毛利斉熙は、しばらく新橋の中間屋敷に住んだ後この屋敷を隠居所としました（本誌No.197参照）。ただし、町並屋敷の機能は明確ではありません。村の生産高を記した郷帳には平井新田の記載はなく、明治初年に著された『東京府志料』には、この村が「津波」（高潮）にあったのち、地元の人「塩浜」といったと記されています。

このように、抱屋敷や町並屋敷は、江戸近郊に多く存在し、たびたび譲渡の対象となりました。『風土記稿』に見られる平井新田の林肥後守抱屋敷の記述には、寛政年中（1789）には太田備中守所持で同12年（1800）に村民持ちになり、その後文化12年（1815）に松平因幡守屋敷を経て、文政11年（1828）に林肥後守持ちになったとあります。あくまでも村の書上で、情報の内容を検証する必要がありますが、なぜこのような頻繁な譲渡が行われたのか、江戸周辺の土地利用は不明な点が多いといえます。

（文化財主任専門員 出口宏幸）

深川猟師町の築造

江東区が埋め立てと密接にかかわることは、すでに述べました。江戸時代における区内の開発地で、前頁の平井新田が小名木川以南で新しい埋め立て地とすれば、古い時期に埋め立てられたのが、隅田川河口部東側に成立した深川猟師町といえます(本誌No.276・277参照)。ここでは、同猟師町を埋め立てという視点から考えてみたいと思います。

汐除堤とは？

深川猟師町は現在の清澄から隅田川沿いに・佐賀・福住・永代付近に成立した8ヶ町からなる町の総称でした。その成立の由緒を記した『寛永録巻』を見ると、その最初に次のような由緒が書かれています。

猟師町の義は、寛永六巳年汐除堤の外干潟の処町場に取立申したき旨、治郎兵衛、藤右衛門、新兵衛、理左衛門、彦左衛門、助右衛門、助十郎、弥兵衛、八人の者半十郎様へ願ひ奉まつり(以下略) ※読み下し文

この由緒書には、寛永6年(1629)に汐除堤の外の干潟を8人(開発者)が町場に取り立てたいと、代官の伊奈半十郎に願ひあげたことが記されています。この汐除堤とは、どのあたりを指すのか、そこが問題ですが、まず下図から考えてみましょう。

猟師町で、もっとも北に位置したの

が弥兵衛町(のちの清住町、現在の清澄付近)で、そこは小名木川と隅田川が合流する場所にあたります。そのため、由緒にある汐除堤は小名木川辺りに設けられていたことになり、寛永6年当時の埋め立ての南端はこの付近と考えることもできます。ちなみに、区の東側にあたる城東地域の小名木川以南も、この当時はまだ開発は一部に留まっていたと考えられ、多くは17世紀中ごろまで待たねばなりません。

これは、あくまで推測の域を越ませんが、小名木川の成立と土地の開発は密接に関わるという見方もできましょう。すなわち、徳川家康が始めたと伝えられる小名木川の開削は、その南部地域の開発が始められた過程で、小名木川が整備され、完成したと見ることも可能かと思われます。

埋め立ての実態は？

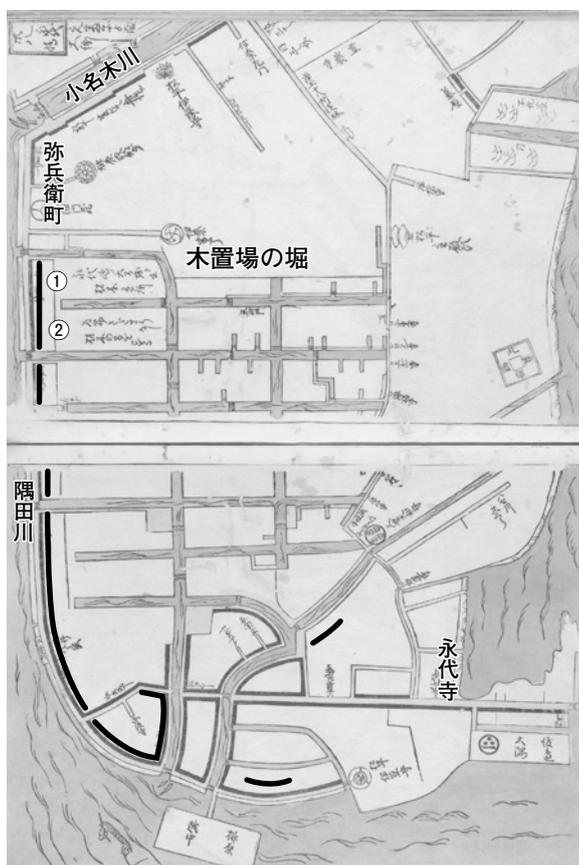
実際、埋め立てがどのように行われ

たのかについては、残念ながら不明です。しかし、『町方書上』の記述を見ると、12年後の寛永18年(1641)には、その東側に広大な木置場(元木場)が成立していたことがわかります。(佐賀町の項)。延宝8年(1680)成立の『江戸方角安見図』には、その木場の状態について「永代嶋ノ六間堀ト云、材木有所」①、あるいは「道筋さだまりなし、材木の間をとる」②などの記述が見られ、当時は道筋さえ定まっておらず、隅田川の水で湿地の体をなすような場所であったと思われるます。そして、そのことはたびたび猟師町におこった「塩上」(海水の浸入)からも推測されます(深川江戸資料館蔵「深川猟師町弥兵衛町図」)。しかし、

そのようなことが事実だったとしても、絵図の様子からは一定程度の地面が自然に形成されていたことを窺い知ることができません。おそらく、深川猟師町の場合も同様で、隅田川が運んだ土砂により、この付近一帯に砂州が形成されていたと考えられ、8人はそこを埋め立てることで、猟師町を成立させたと推測されます。

永代島と呼ばれたこの付近は、絵図を見る限り、永代寺(現在の深川公園の辺り)の東側は海であったことがわかります。そこが順次埋め立てられ、その後に平井新田が成立したと見るこ

とができるでしょう。(文化財主任専門員 出口宏幸)



延宝8年(1680)『江戸方角安見図』
国立国会図書館デジタルコレクション
※概ね——(加筆)が猟師町

井の頭公園の辛夷碑

こぶし

三鷹市と武蔵野市にまたがる井の頭池は、神田上水の水源地であり、17世紀の初め頃には江戸市中への上水として主要な役割を担っていました。「井の頭」の名前は、『東京市史稿』水道編の「一に収録の『井之頭略縁記』」によれば、寛永6年（1629）に家光御成の際、親の井あるいは七井之湖と呼ばれていたこの池を井の頭の池と名付けられるように命じたとされています。家光は、池の側にあつた辛夷の樹に、小刀にて「井之頭」と彫つたとされています。

現在、池の西側には天台宗明静山圓光院大盛寺、池の側には井の頭弁天堂があり、その周りには石造物が配置され、そのうちの11基は「井の頭の石造物群」として三鷹市指定文化財になっています。この中に明治26年（1893）に建立された辛夷の碑があります。石碑表面の上部には「徳川三代將軍御切付旧跡」と陽刻されています。家光が井の頭の池と名付けた由来にちなんだもので、揮毫は貴族院議員で大日本茶道協会の初代会長も務めた鳥尾小弥太です。そして台座には「深川水船組」と陽刻され、裏側には石碑の寄付者が陰刻されています

【表】辛夷碑の奉納者

寄付額	住所	氏名	寄付額	住所	氏名
5円	—	植草留蔵	1円	—	金子国吉
	—	伊澤一政		—	石橋植蔵
	—	山浦俊武		—	原栄太郎
2円	—	小林長右衛門		—	小倉富右衛門
	—	山本亀松		—	栗林健治郎
	—	鈴木茂兵衛		門前町	石岩
1円	—	手塚清治郎		—	第六一番蛤金
	—	鈴木米吉		亀住町	柳屋亮助
	—	酒井兼太郎		山本町	宮嶋之信
	—	小澤竹治郎		—	河原駒吉
	—	鈴木テウ		—	高橋儀平
	—	小峰吉五郎		—	齊藤勝治郎
	—	富本治助	—	宮部仁三郎	
	—	渡辺彌三郎	—	高橋栄治郎	
	—	矢口増治郎	金30銭	—	折原甚太郎
	—	原鉄之助	世話人	—	手塚清治郎
	—	戸波昌道		—	鈴木米吉
	—	手塚金治郎		—	植草留蔵
	—	山口文吉		—	山口文吉
	—	植村平重		—	蜂龍亭手塚金治郎
	—	星谷石松		—	

〔表〕参照。
深川の水船について は、昭和59年（1984）に東京都から刊行された『東京の水売

り』（都史紀要三二）に詳しく記されており、それに基づきながら石碑建立までの動向を見ていきます。まず、「深川水船組」とは、本所・深川一帯に飲み水を販売する業者の集まりであり、神田上水や玉川上水の余水を飲み水として販売していました。業者たちは、幕府に上納金を納めて営業を認められていましたが、明治時代になると上納金が廃止され、持っていた特権もなくなります。その後、新規の業者の参入や水道敷設計画などが立ち上がり、新たな対応を迫られます。明治11年に深川飲水営業組合を立ち上げ、東京府から鑑札を下付されました。そして、明治17年には、江戸時代から続く水船渡世の家柄である山浦利八を頭取、富岡門前町に住む手塚金次郎を副頭取として、飲水営業会所を設立し、手塚の自宅を事務所としました。

ところが、東京府は明治19年12月に芝区桜田備前町の村田寛らに日本橋区一石橋際の吐水箇所（みづすい）に設置することを許可します。村田は瀧水社（たきみづ）を設立し、翌年8月には小名木川の高橋際に深川支店を設置して、深川飲水営業会所と激しい競争を繰り広げることになります。激しい競争の末、深川飲水営業組合と瀧水社は合併し、江東瀧水会社が設立されることとなります。

井の頭公園の辛夷碑は、江東瀧水会社の株式会社化と淀橋の改良水道工式が行われた明治26年の建立ですが、「深川水船組」として奉納したのは、江戸時代以来飲み水に苦労した深川の「意地」なのかもしれません。

（深川東京モダン館副館長 龍澤潤）



井の頭恩賜公園内の辛夷碑

「深川にあった肥料商店の歴史」

同展は2019年4月24日から同年7月21日にかけて、同館の収蔵資料を紹介する趣旨で開催している展示です。昨年、深川で明治から昭和にかけて肥料商を営んでいた大井家から同家や経営に関する資料が寄贈されました。戦前の大正から昭和初期にかけての資料が、まとまった分量で残されている例は、関東大震災・戦災を経てきた江東区にとってはきわめて珍しいことです。

その内容の一部を紹介しつつ、大井商店の歴史と深川の関連について探ってみましょう。

「大井家の人々」

寄贈された資料は、主に3代目店主大井清吉氏の時代が中心です。地元永代1丁目の代議員、家庭防火団長、国勢調査任命書などの地域活動に関する資料、戦後、今の門前仲町に新築した屋敷の見積書、家族が通った学校からの行事連絡、得意先や近所との年始挨拶の記録(画1)と配った手ぬぐいなど、日常的な家族の風景がうかがえます。

「大井商店の歴史」

肥料商としての大井商店は、明治中



画1:「年始受納帳」(昭和12・14年) 年始挨拶の記録

期に創業したと見られます(注)。資料中、最も古い年代の資料は大正2年(1913)の「証 金貳百円也」で、店員の賞与を店が預り、後日年利息1割で精算するという内容です。同様に同7年(1918)には店員からの賞与預かり分、利息、渡金等の精算を記した文書もあり、店員への給料等を預って経営資金にするとともに、店員の福利を考慮した制度を設けていたことが分かります。

大井商店は大正10年(1921)合資会社大井商店となり、その際に作成された定款(会社設立の目的、おもな営業内容を定めたもの)・社則をはじめ、経営資料(画2)が残されています。その後会社は順調に滑り出したようですが、関東大震災による被災を乗り越えて昭和初期に。昭和15年(1940)



画2:「売上帳」(大正12年) 『諸経費附上』(昭和2年) 経理の帳簿

には複数の深川の肥料商とともに、新たな肥料製造会社を請負うなど、戦時体制の厳しい経済情勢のなかで肥料業界を守ろうとする資料も見られました。大井家は戦火が烈しくなる少し前に、鶴沼(神奈川県藤沢市)に疎開しました。その時これらの資料を運んだことから、焼失を免れました。

「大井商店と深川富吉町」

同商店があつたのは深川富吉町(現永代1-15付近)。大島川西支川が永代通りに交わるあたりにありました。



画3:本所深川絵図(文久2年1862)

江戸初期の材木置場に開かれた掘割が、「蔵の町・深川」を育てました。

沿岸の奥野河岸を利用し、北へさかのばれば、南から油堀・中之堀・仙台堀と交差し、同業の肥料商店が集中する佐賀町ともつながっていました。

これらの川筋は、江戸初頭の寛永18年(1641)日本橋から移転してきた材木置場に開かれた貯木と搬送のための掘割がその発祥です。江戸時代に開かれた川のネットワークを土台にして、明治になって商店が設立され、発展したことになります。

大井家資料は深川に流れる歴史の中から生まれ、肥料商としてその歴史に1ページを刻み、戦後まで深川とともに歩んできた家族の姿を反映し、深川の庶民像を雄弁に物語ってくれる証言者です。

(注)酒井智晴「新河岸川筋船問屋の経営と鉄道敷設・河川改良への対応―下新河岸伊勢安・福岡河岸福田屋を中心として―」(『交通史研究』第38号)

1997年(所収)で、荒川支流の新河岸川の下新河岸にあつた船積問屋、伊勢安の明治24年(1891)から同34年(1901)にかけての「糠・灰買入元」のなかに「深川肥料問屋」として「大井平次郎」の名があり、すでに営業していたことが分かります。

(中川船番所資料館 久染健夫)

瓢池園と旭焼製造場

深川にあった幻の2つの陶磁器工場

明治期、瀬戸（愛知県）や有田（佐賀県）などの既存の窯業地のほかに、東京（主に隅田川周辺）には新たに造られた陶磁器工場が多くありました。ここ深川森下界隈にも2つの工場がありました。しかし、いずれも日本の近代窯業史上重要な陶磁器工場であったことを皆さんご存知でしょうか？

瓢池園

錦様陶磁器製造所瓢池園（以下、瓢池園）は、河原徳立（1844～1914）が明治6年（1873）に深川森下町37（現森下3-5、図①）の住居敷地内に設立した輸出主体の陶磁器工場です。屋号はこの土地が瓢筆



図 瓢池園・旭焼製造場の位置

※「深川区全図 明治30年11月調査」(国立国会図書館デジタルコレクション)を基に作成 工場は位置を示すものであり、範囲を示すものではありません。



写真1 瓢筆園「青磁上絵金彩窓絵蓋付壺」(瀬戸蔵ミュージアム所蔵) ※左は外底面の銘

堀（五間堀）の西側にあり、敷地内に「瓢筆池」があったことから名付けられたとのこと。同13年（1880）には深川区富川町21（現森下4-12-24・25、図②）、同20年（1887）には本所区林町2丁目86（現墨田区菊川1-6、図③）と二度の移転のあと、同29年（1896）頃には後述する深川区東元町14（現森下3-13、図④）にあった旭焼製造場を買収し、ここに移転しました。同園では作陶はせず、瀬戸や有田、清水（京都府）、薩摩（鹿児島県）、横浜太田真葛（神奈川県）などの窯業地から壺や皿などの素地

（素焼き）を買い入れ、工場で上絵付を施し焼成していました。写真1の「青磁上絵金彩窓絵蓋付壺」（瀬戸蔵ミュージアム所蔵）の外底面にある銘には「瀬戸／加藤三平製」と見え、瀬戸の工房で製作された素地であることが分かります。『明治十一年仏国博覧会出品目録』（仏国博覧会事務局、明治13年）に、「花瓶、ランプ台、壺、手箱、蓋物、皿、手札皿、珈琲具（コーヒーカップ&ソーサー）、煎茶具（急須など）、水呑、水次、鉢、飾板、手紐釦」と見え、多品種に対応していたことが分かります。絵画風（主に山水画・花鳥画、人物画）の絵付作品は「東京絵付」「瓢池園風」と呼ばれ評判になり、当初は起立工商会社、のちに森村組（現森村商事株式会社）によって製品が輸出されました。

明治32年（1899）5月には絵付部門が愛知県名古屋市長堀町（現東区白壁）に移転し森村組の専属工場となり、同36年（1903）5月には美術工芸部門が同市主税町（現東区主税町2丁目）に移されます。同42年（1909）にはすべての事業が森村組の代表である森村市左衛門らにより創立された日本陶器合名会社（現株式会社ノリタケカンパニーリミテド）に統合され、瓢池園の事業はすべて廃止となりました。

旭焼製造場

旭焼は明治16年（1883）9月にドイツ人技師ゴットフリート・ワグネル（1831～192）が東京帝国大理学部応用研究所で研究を始めました。その後、小石川区西江戸川町（現

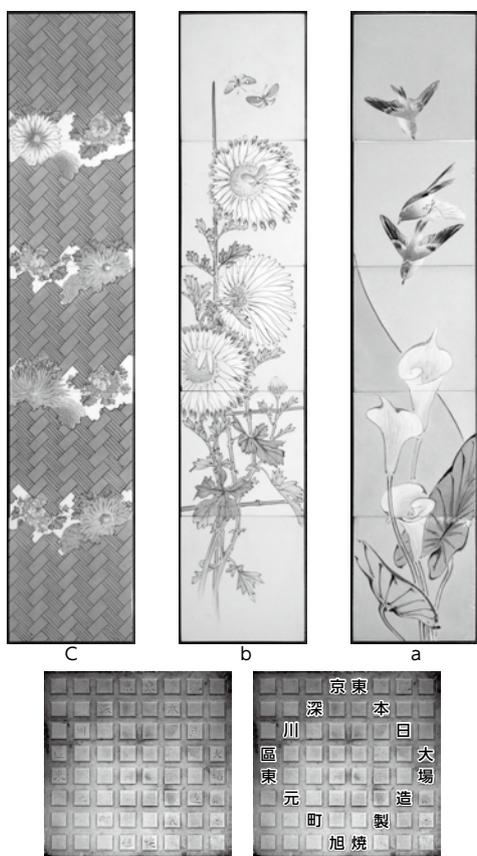


写真2 旭焼 装飾用陶板

a.「阿蘭陀海芋に鳥三羽図」、b.「菊に蝶図」、c.「籠目菊花図」(滋賀県工業技術総合センター信楽窯業技術試験所所蔵)

文京区水道1・2丁目)、ワグネルの自宅である赤坂区(現港区)に窯を設けました。ここでは、白い素地の上に日本画のモチーフを絵付し、その上に釉薬を掛けて焼成する釉下彩の技法を取り入れ、造られた製品を吾妻焼と称していました。窯は浅草区(現台東区)蔵前の東京職工学校(震災後の大正13年に荏原郡大岡山に移転し、昭和4年東京工業大学と改称)内に移され、明治20年(1887)には旭焼に名称が改められました。明治23年(1890)、渋沢栄一・浅野総一郎の出資によって旭焼組合が結成され、東京工業学校(商工学校からの改称)の窯とは別の深川区東元町14(図④)に旭焼製造場が設けられました。主任は明治27年秋までは植田豊橋、同年秋以降は平野耕輔というようにいずれもワグネルの弟子があたりました。規模は、「旭焼製造所予算」(渋沢史料館所蔵)を見ると地所六百坪(2000㎡弱)とみえます。製造場では主に暖炉の装飾用陶板(タイル)が製造されました。現存する陶板は1〜5枚(一枚辺り約15cm角、厚さ約1cm)1組で、4〜5枚組のほとんどは縦位に花鳥画など絵画風の絵付が施されています(写真21a-c)。陶板の裏面にはいずれも「大日本東京深川区東元町旭焼製造場」と陽刻され

元号	西暦	瓢池園および関連事項	旭焼製造場および関連事項
弘化元年	(1844)	12月3日 佐藤五之助(徳立)、幕臣佐藤治左衛門信吉(江戸小石川)の五男として生まれる。	
安政5年	(1858)	12月 佐藤徳立、御徒組河原與一郎の養子となり、河原徳立と改姓。	
慶応4年	(1868)		5月15日 ゴットフリート・ワグネル来日(長崎)
明治5年	(1872)	1月 内務省勸業寮ウィーン万国博覧会事務局御用掛となる。 6月 同局附属製陶所[浅草芝崎(現台東区西浅草1-6)]の主任となる。	ワグネル、ウィーン万国博覧会御用掛となる。
明治6年	(1873)	7月 博覧会事務局附属製陶所閉鎖。8月26日、深川森下町37番地(現森下3-5)に瓢池園を設立。工場は建坪27坪のほかに窯場5坪、絵付窯1基。上記製陶所の職工を雇用。	
明治7年	(1874)	11月3日 起立工商会社、竹川町(現銀座7丁目)に設立。瓢池園の製品を輸出。	
明治9年	(1876)	3月 森村市左衛門・豊兄弟が東京銀座に森村組設立(のちに、瓢池園の取引先となる)。/アメリカ・フィラデルフィア万博(5~11月)に出品し、優等賞牌を受ける。	
明治12年	(1879)	オーストラリア・シドニー万博に出品し、名誉金賞牌・一等金賞牌を受ける。	
明治13年	(1880)	深川区富川町21(現森下4-12-24・25)に工場を移転。建坪45坪、窯場8坪、絵付窯3基。画工13名、女工5名、雑工5名。	
明治14年	(1881)		浅草区(現台東区)蔵前に東京職工学校が設立。
明治16年	(1883)		9月、ワグネル東京帝国大学理学部応用化学実験所(神田区一ツ橋)で陶磁器の研究(助手:植田豊橋)を開始。
明治17年	(1884)		ワグネル、実験室が手狭になったことから小石川区西江戸川町(現在の文京区水道1・2丁目)に窯を築き、焼成試験を行う。
明治18年	(1885)	不況のため、倒産の危機。	10月、ワグネル、自宅を赤坂区に移し、その付近に窯・画工場を設置。完成した陶器を吾妻焼と命名。/11月ワグネル、東京職工学校の教師となる。
明治19年	(1886)		東京職工学校に陶器玻璃工科が設置され、ワグネルが主任となる。
明治20年	(1887)	3月、本所区林町2-86(現墨田区菊川1-6)に工場を移転。建坪12坪、窯場8坪、絵付窯4基。画工23名、女工7名、雑工5名。	吾妻焼の製作は、東京職工学校内に移り、旭焼に改称。
明治23年	(1890)		旭焼組合立ち上げ/深川区東元町14番地(現在の森下3-13)に旭焼製造場を設置/植田豊橋が旭焼製造場の主任となる(明治27年秋頃)。
明治24年	(1891)	起立工商会社、廃業。	
明治25年	(1892)		11月8日 ワグネル、東京駿河台の自宅にて逝去。同月12日青山墓地に埋葬。
明治27年	(1894)		平野耕輔が旭焼製造場の主任となる。
明治29年	(1896)	5月 瓢池園、旭焼製造場の土地(深川区東元町14)を買収?移転。総建坪134坪(画工場2棟、附属建物2棟)のほかに窯場20坪、本窯1坪、素焼窯1基、絵付窯1基、小花苑。画工64名(男54、女13)、雑工8名。	5月 旭焼製造場が瓢池園に買収される? *東京工業学校における製作もこの頃に終了/旭焼組合解散
明治32年	(1899)	5月 瓢池園絵付工場を愛知県名古屋市長塚町2-108に移し、森村組の専属画工場となる。	
明治35年	(1902)	1月 この頃まで瓢池園美術工芸部存続。/8月 河原徳立、東京から京都に移住し、工場は長男太郎に譲る。	
明治36年	(1903)	5月 瓢池園美術部門、名古屋市主税町の小工場に移転し、素地の製造を開始。	
明治37年	(1904)	1月1日 森村市左衛門(森村組)、大倉孫兵衛ら日本陶器合名会社(現名古屋市西区、現/リタケカンパニーリミテド)設立。	
明治40年	(1907)	河原徳立、廣瀬満正(徳立次男・次郎の養父)との共同経営による京都瓢池園[京都三条通(現京都市東山区)]を設立(国内向け)。	
明治42年	(1909)	瓢池園、日本陶器合名会社に業務を移譲。	
大正3年	(1914)	8月28日 河原徳立逝去	
大正9年	(1920)	京都瓢池園廃業	
昭和14年	(1939)	百木三郎(河原徳立三男)、東洋陶器(現TOTO)2代目社長に就任。	
平成28年	(2016)		3月 旭焼の資料(東京工業大学所蔵の陶板2組を含めた7点および信楽窯業技術試験場所蔵の陶板27組)が日本化学会の化学遺産に認定。

表 瓢池園・旭焼製造場 関連年表

*瓢池園の項目については宮地英敏「資料紹介」河原五郎著「河原徳立翁小伝」(『エネルギー史研究』22 九州大学附属図書館付設記録資料館産業経済資料部門 平成23年)等に基づき作成。

ています(写真21c裏面)。明治29年に瓢池園によって買収されたよう、旭焼組合も解散しました。
現存する製品
瓢池園の製品は、「墨絵山水図額」(東京国立博物館所蔵)や「上絵金彩山水図皿」(岐阜県現代陶芸美術館所蔵)など博物館での収蔵が確認され、個人所蔵のものを含めると管見の限り約30

点(組)が確認できます。旭焼製造場の陶板は、滋賀県工業技術総合センター信楽窯業技術試験場や東京工業大学、京都国立博物館などで所蔵し、管見の限り約100点(組)が確認できます。いずれも輸出主体であったため、もともと関係者が所蔵していたもの(見本を含む)が、のちに公的機関などに寄贈された事例が多いと言えます

す。いずれの製品も近年、個人コレクターが海外市場で購入し、日本に里帰りさせている事例が増えています。海外には知られざる関連製品が存在することが想定されますが、残存数は不明と言わざるを得ません。今後、製品が多く確認され、研究が進むことが期待されます。(文化財専門員 野本賢二)

文化財まめ知識12

江東区内の道標3



以前、本誌No.281・284にて江東区内にある「道標」について紹介しました。

道標とは、石柱に寺社などの目的地、方向、道のり、道の通称名などを刻んだものです。これらの道標は、街道の交差点や分岐点の外、寺社の門前にも建てられました。

江東区では8件の道標を有形民俗文化財(その内区指定文化財は5件)として指定・登録しています。城東地域(亀戸・砂町)にある2件の道標(いずれも区指定文化財)を紹介します。

亀戸浅間神社の道標
 亀戸浅間神社(亀戸9丁目)は、大永7年(1527)創建されたという創建伝承があります。

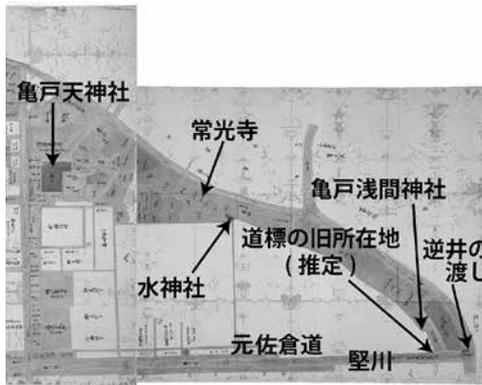
この道標は亀戸浅間神社の境内にあります(①)。左側面には享和元年(1801)10月の紀年銘があり、道



①富士せんげん・亀戸天神・六阿みだ・あさくさ道道標 享和元年在銘

標が十九世紀の初めに建てられたことが示されています。また正面には上段に「是より右」、下段に「道」、中段に右から「富士せんげん(亀戸浅間神社)・「亀戸天神」(亀戸3丁目・亀戸天神社)・「六阿みだ」(亀戸4丁目・常光寺)・「あさくさ」(浅草)の順に寺社・地名がそれぞれ刻まれています。

正面の刻銘は、右に記された浅間神社が最初に至る場所と考えられます。また、浅間神社などの位置関係からみて、本道標が示す道は、堅川沿いの元佐倉道から浅間神社に向かつて北方に分岐する道と推測されています。元々本道標は、堅川沿いの元佐倉道と、その道から分かれて北方向の浅間神社に至る道との分岐点に、東に向けて建てられたと考えられています(②)。



②天明元年(1781)「本所・深川割絵図」(江東区教育委員会所蔵)※2枚の絵図を合成

ツ目/地藏講中/願主良歡」の刻銘があります。刻銘の「本所六ツ目」(堅川南岸の小名木村・大島七・八丁目の一部)は、堅川にあった「六之橋」にちなんで「六ツ目」と呼ばれていました。「願主良歡」が中心となり、「地藏講中」が道標を建てたと考えられますが、両者の実像は不明です。尚、本道標は、数度の移転を経ており、現在の場所へ移されたのは平成11年です。

上妙寺の道標

次に紹介するのは上妙寺(東砂1丁目)の門前にある道標です(③)。寺の創建は寛永2年(1625)とされ、鬼子母神信仰の寺として多くの人の信仰を集めました。



③鬼子母神道道標(正面・全景)



④鬼子母神道道標(左側面・部分)

本道標の塔身正面には「南無妙法蓮華經」の刻銘があり、左側面には「是ヨリ鬼子母神道」、右側面には「文化十四大歳五月吉辰/十六世日閑代再建」、基礎部右側面には「世話人/神田小柳町井筒屋久治郎/伊勢屋平吉/佐

野屋平七」の刻銘が確認されます。

刻銘から見られるように現在の道標は、文化10年(1813)に再建されたことがわかり、最初に建てられた道標はそれより時代を遡ると考えられます。また、基礎部の刻銘から神田小柳町(千代田区神田須田町・鍛冶町の一部)の人々により建立されたことが明らかになります。これは上妙寺の鬼子母神信仰が隅田川を越えて広まっていたことを示唆しています。

一方でこの道標は、現在は門前に設置されていますが、かつては小名木川沿いに建てられていました(④)。



⑤現在地に移動する前の小名木川沿いに建つ鬼子母神道道標(昭和30年頃)

今回取り上げた2件の道標は、いずれも設置当初は、現在とは別の場所に建っていました。このように区内の文化財には移転を重ねつつ、遺されている事例があることを知っていただきたいと思えます。

(文化財専門員 功刀俊宏)